

師弟の絆 五輪へ挑戦

京滋女子スイマー「世界」大一番へ



韓国・光州で開催中の水泳世界選手権で、競泳女子200メートル個人メドレーに挑む京滋出身スイマーの活躍を、ジュニア時代の2人の指導者が見守っている。優勝すれば東京五輪代表に決まる大一番だけに「気負わず、普段通りの泳ぎで最大限の力を発揮してほしい」と教え子の飛躍を願う。

大橋選手 × 奥谷さん

「いつもの泳ぎを」

出場するのは、前回銀メダルで日本記録保持者の大橋悠依(23) 彦根市出身(22) 京都市右京区出身の両選手。幼少期からそれぞれ地元のエトマンスイミングスクールでメドレー4泳法を学んだ。同系列のスクール所長を務める奥谷直史さん(51) 大阪府は、大橋選手を高校卒業まで指導した。「方に頼らない大きな泳ぎに将来性を感じた」と思い返す。腕全体で水をつかむために小さいゴムボールを握らせたり、体幹を養うため水中で逆立ちするトレーニングを取り入れた。水中で真っすぐに姿勢を保つ練習は、大橋選手の泳ぎの根幹になっているという。

大橋選手は日本女子のエースとして期待を背負い、4月の日本選手権は重圧に苦しんだ。メドレー2種目を制して意地を見せたが思うようにタイムが伸びず、奥谷さんは「いろんなプレッシャーもあると思うが前回の経験を生かし、いつもの泳ぎをしてほしい」

高校時代の大橋選手と奥谷さん(左) 奥谷さん提供

大本選手 × 上野さん

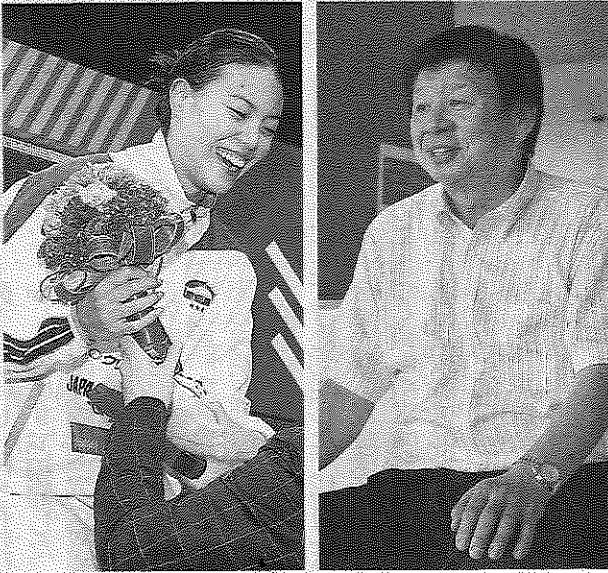
「結果はおのずと」

とエールを送る。大本選手を指導した同スクール事業本部長の上野昌宏さん(58) 東京都は「4泳法に穴がなかった」と振り返る。小学5年で200メートル個人メドレーへの挑戦を勧め、同種目に本格的に取り組みきっかけになったという。

大本選手にとっては5年ぶりの主要国際大会。上野さんは今季、教え子が自己ベストを何度も更新する好調さを「バタフライで水の抵抗が少なくなった」と分析する。世界選手権では「レースを通じ、トップ選手と自分との距離を感じてほしい。結果はおのずと付いてくる」と活躍を祈る。

21日の200メートル個人メドレー予選が両選手の初戦になる。

(山本旭洋)



①「トップ選手にだけだけ迫り、差がでる」に悩むのかを感じてほしいと話す上野さん(京都市アクアリーナ) ②初の世界選手権に臨む大本選手(4月、東京辰巳国際水泳場)